



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	チチエーリンにおける「家政学」と「経済学」：ロシア「自由主義」の性格規程をめぐって
Author(s)	杉浦, 秀一; Sugiura, Shuichi
Citation	スラヴ研究, 37, 109-128
Issue Date	1990
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5187
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113312.pdf



チチューリンにおける「家政学」と「経済学」

—— ロシア「自由主義」の性格規定をめぐって ——

杉 浦 秀 一

はじめに

もし自由主義が、カール・シュミットの言うように、政策体系としては一貫性を持つことが不可能であり、自由主義的政策体系そのものとしては存在しえず、「いかなる国の自由主義も……名種名様に非自由主義的な要素、理念と結び付いている」が¹⁾、それにもかかわらず、その自由主義的政策の背後に、「自由主義的思考の驚くべき一貫性²⁾」が存在しているとするならば、あるいはまた、ハロルド・ラスキが指摘したように、自由主義が「一つの教説であるよりは、むしろ心の習慣 (habit of mind) ³⁾」とするならば、個々の自由主義者の思想研究に当たっては、彼の「政策」体系にさきだって、「思考」の内実、habit of mind のあり方が分析されなくてはならないだろう。ましてやボリス・チチューリンのような人物、自由主義者であるか否かをめぐって評価の分かれる人物を取り扱う場合には、この作業が一層重要となろう。ここで言う「思考」の内実、habit of mind、とは哲学や理論体系という意味ではない。むしろそれらの背後にある、生活感覚、価値観、「生活世界⁴⁾」と呼ぶべきものである。個々の哲学や理論体系は、その内部に矛盾や論理的な不整合を含みうる。いや、含まざるを得ない。しかし、それらの哲学や理論体系の構想者にとっては、それらは通常「真なるもの」、首尾一貫したものとして捉えられる。すなわち、個々の哲学や理論体系、さらには政策体系に内的統一性を与え、思想家に自己の思想が「真理」であり、首尾一貫しているという確信を与えるものが、「生活世界」であり、ここで言うところの「思考」である。

「強力な権力と自由主義的諸方策」というデーゼに要約されるチチューリンの「保守的自由主義」の性格規定を巡って、従来様々な見解が表明されてきた。社会階級的観点から、彼を「地主ブルジョア的自由主義」の理論家とする見解、彼の哲学を分析し、「新ヘーゲル主義」「カント化されたヘーゲル主義」「ヘーゲル右派的自由主義」とする見解、経済学に注目し、「俗流ブルジョア経済学」の代弁者とする見解、国家論、政策論の検討から、「国家主義者」「専制の擁護者」とする見解、あるいはまた「ロシアで数少ない真の自由主義者」とする見解、等々である⁵⁾。以上のような状況の中で、1987年にヴァリツキは『ロシア自由主義の法哲学』を発表し、チチューリンを「古典的自由主義者」と規定した⁶⁾。彼はチチューリンが個人の内的価値、「自然権的自由権」をあくまで擁護したことを強調する。筆者はこのヴァリツキの見解に注目したい。なぜなら、自由主義の本質が個人主義であるとする主張は、自由主義の擁護者によっても、またその敵対者によってもしばしば表明されてきたし⁷⁾、通常受け入れられてきた見解だからである。もし自由主義の本質、

「思考」、habit of mind が個人主義にあり、またチチェーリンがその擁護者であるとすれば、ヴァリツキの見解は正しいと言わざるを得ない。筆者はヴァリツキの見解に同意できない。しかし、筆者の見解を述べる前に、まずヴァリツキの議論を検討しよう。

ヴァリツキは、上述の著作で、第一に「革命前のロシアにおいて、自由主義の知的伝統は、通常信じられているよりも実際には大きなものであった」ということ、第二に「ロシアの自由主義思想家たちの主要な関心は、法の支配の問題であり、ロシア自由主義のもっとも貴重な遺産は……法哲学への貢献である⁸⁾」ことを示そうとする。そしてボリス・チチェーリン、ウラジーミル・ソロヴィヨフ、レオン・ペトラジッキー、パーヴェル・ノヴゴロドツェフ、ボクダン・キスチャコフスキー、セルゲイ・ゲッセンの六人の思想家を取り上げた。その際彼は「近代の法における発展と、法思想における近代の危機は、社会思想、社会組織、法および行政についての三つの大きなパラダイムの間の半ば無意識的な対決に根ざしている。」と述べ、「ゲマインシャフト的あるいは有機的、共同体的、家族的」パラダイム、「ゲゼルシャフト的あるいは契約的、商業的、個人主義的」パラダイムおよび「官僚的行政的」パラダイムの三つをあげた⁹⁾。第二の、すなわち「ゲゼルシャフト的あるいは契約的、商業的、個人主義的」パラダイムを擁護したのが自由主義的潮流とされる。「ロシアの自由主義者たちは、ヨーロッパの自由主義の主流的伝統に従って、法のゲゼルシャフト的型を、固有なもの、法の理念に最も近いものとみた。彼らはこの限界を知っていた。しかし彼らはこれを個人的自由の必要な基盤、人格の不可侵性の保護物、政府の気まぐれな要求に対してだけでなく、時にそれ以上に、社会的同一性あるいは共同体の道徳的圧迫のメカニズムにたいして、人間人格を護る手段として擁護した。¹⁰⁾」その結果、ロシア自由主義は、一方では法を道徳に解消するゲマインシャフト・パラダイムに対決して、法の固有の領域が存在すること、法と道徳は区別すべきことを強調し、他方では「合法的立法」すなわち「政治」に対して「普遍的な人権」すなわち自然権の人権、自然法、を厳密に区別しなければならなかった。

以上の基本的命題に基づき、彼はロシア自由主義の伝統を自然法思想の復活ととらえ、この過程を、「古典的自由主義」から「新自由主義」そして「法治社会主義」への発展として把握する。ヴァリツキによれば、チチェーリンは「古典的自由主義」を代表する。チチェーリンが法と道徳を厳格に区別したこと、彼が時とともに「自然権の人権」を強調するにいたり、ヘーゲル的国家観、個人観からカント的国家観、個人観へと移行したこと、その結果彼の『法哲学』（1900）がロシアにおける自然法復活にとって決定的に重要な位置を占めたことが指摘される。しかしチチェーリンは「古典的自由主義」の伝統に従い、法の前での形式的平等に固執し、経済領域への国家のいかなる干渉も認めず、社会問題を法の領域から排除した。ここに彼の限界があったとヴァリツキは言う。

ソロヴィヨフは通常自由主義思想家の中に数えられない。しかしヴァリツキはソロヴィヨフが法の固有の領域を承認し、法と道徳を区別したこと、また彼が「尊厳的生存の権利」を主張したことに注目する。この「尊厳的生存の権利」とチチェーリンの「古典的自由主義」との結合が「新自由主義」である。ペトラジッキーの心理学的法学、とノヴゴロドツェフの「自然法の復活」の宣言がそれを代表する。さらにキスチャコフスキーのマルクス主

義への一定の共感と、セルゲイ・ゲッセンの社会主義革命後の活動をもって、「法治社会主義」へと移行するとされる。

以上がヴァリツキのシェーマである。ここで注目すべきは、ヴァリツキが法と政治とを厳格に区別している点である。彼は言う。「ロシア自由主義の理論家たちは、カデット党の指導者たちよりも、法と政治との間の闘争の可能性に、良く気づいていた。このことによって、何故ペトラジツキーとノヴゴロドツェフが（二人ともカデットの中央委員であったが）自由主義的原理と長期的な法利益を、純粋な政治的考慮の犠牲にすることを好まなかったかが説明される。このために彼らは自己自身を党の右翼に見出したが、しかし最終目的についての彼ら各々のビジョンはおそらく平均的なロシア自由主義者たちの理想よりも左翼にあった。¹¹⁾」ここで彼の言う「自由主義的原理」とは「普遍的な人権への信念」であり、超越論的人権概念を擁護する立場である。彼の言う「政治」と「法」の対立とはすなわち、ロシア自由主義における「政治運動」と「自由主義思想」との分裂である。カデットは政治的「左派」のミリュコーフの指導下にあり、ペトラジツキー、ノヴゴロドツェフらの政治的「右派」（しかし理念的「左派」）はほとんど影響力を持ち得なかった。「このことは、彼らの自由主義理論家としての重要性を減じはしない¹²⁾」と彼は言う。たしかに思想が思想家の生きた時代を離れて、大きな影響を持つことは認めよう。しかし自由主義運動にほとんど影響を与えなかったばかりか、時に運動に対立さえもした自由主義思想の流れを指摘することにより、はたして「ロシア自由主義の知的伝統」の大きさを示したことになるのであろうか。ロシア自由主義の「思想」一般が「政治」と対立したのではなく、チチャーリンやノヴゴロドツェフらの「思想」が自由主義運動内でヘゲモニーをとりえなかったことこそが問題とされなければならないのでなかろうか。

政治とは、望ましい秩序の形成あるいは維持を志向する運動と言えよう。従って、運動論は政治思想の不可欠の構成要素をなす¹³⁾。（ここで筆者は「運動論」を、政治戦術、戦略ばかりでなく、秩序形成、政治的、社会的合意形成のあり方についての考察をも含む広い概念として使用する。）「運動論」を欠いた「思想」は、もはや十全な「政治思想」たりえない。ヴァリツキは六人の思想家の「思想」を「運動」に対置させ、彼らの「思想」内の運動論的契機を捨象し、政治思想を「法哲学」と同一視し、「自由主義思想」を「普遍的な人権への信念」へと還元する。

彼は六人の思想家を自然法の復活、強化、およびその発展の流れにおいてとらえた。その結果、秩序の問題、すなわち政治の問題が彼の視野から欠落する。ゲゼルシャフトとは確かに個人主義に基づく社会であり、自由主義の哲学的基礎は個人主義である。しかし問題とされるべきは、「諸個人」相互の社会的結合の内実ではなかろうか。そもそも「個人」が、厳密な意味での個人なのか、家長として把握された個人なのかによって、個人主義の内容も異なってくるし、秩序形成のあり方、「個人」の政治的権利と社会的合意の構造も異なってくる。ハーバーマスは『公共性の構造転換』において、「自由主義」が近代に固有な「公共性」の圏、「生活世界」の形成を前提として初めて成立すると指摘した¹⁴⁾。ここで言う近代的「公共性」とは市場を媒介とした商品交換が経済領域ばかりか、文化、思想にまで波及し、「市場的思考」が社会の全領域を覆い、社会的結合の前提をなす事態を

さしている。筆者もまたこのような把握が妥当であると考え¹⁵⁾。市場を媒介にした諸個人の結び付きという脈絡において、自由主義の「個人」概念が成立してくるのである。

従って、以下の節で、第一に、チチェーリンの「自由主義」がよってたつ「個人」概念、人間観、「生活世界」を分析する。第二に、チチェーリン的「生活世界」を背景として生み出された「自由主義」の運動論を検討する。そして最後に、チチェーリン「自由主義」の歴史的な位置づけに関する筆者の暫定的考えを示してみたい。

1 チチェーリンにおける「家政学」と「経済学」

—— オットー・ブルナーの「全き家」の概念を利用して ——

チチェーリンは1887年に親戚友人と自分の所領の農民たちを集めて、タンボフ県カラウルの所領購入50周年の祝宴の場で次のような演説をした。(以下「50周年演説」とする。)

「今日私は、カラウルが我々家族の所領となり、ここに我々の定住の居を構えてから50年が経過したことをあなたたちと記念するために、あなたたちに集まってもらった。1837年に私の父はカラウルを購入し、そこに住みついた。当時農民たちにご馳走が振舞われた。私はまだ小さな子供だったが、それを生き生きと覚えている。おそらくあなたたちの古老たちもまた同じくそのことを良く覚えているだろう。今日私はあなたたちとともに、私の両親の追善供養をした。両親を感謝と共に追憶しなければならなかった。私の父が農奴制のもとで、いかにカラウルを管理したかを古老たちは語るができるだろう。即ち、公正かつ理性的で、余分なものを要求せず、必要なときには厳格に振舞い、全ての者の幸福を配慮したということ。

父の死後私の弟、ウラジーミル・ニコラエヴィッチが管理した。彼についてまた良き言葉によって語るなければならない。残念ながら彼は病気のため今日ここに参加できなかった。彼の時代にあなたたちはツァーリから自由を獲得した。彼は地主の利益だけでなく農民の利益をも配慮して、あなたたちの新しい生活を安定させ、しかも悪意のかけらもなくそれを行った。彼もまた父と同じく公正かつ理性的に管理したと、あなたたちの全ての者は言うだろう。従って（農民と我々との）関係は変わらなかった。農奴制は廃止された。地主の権力は失われた。しかし農民との結びつきは以前のように友愛に満ちた家族的なものであり続けた。

その後わたしたち（兄弟）は（領地を）分割した。母は長男の私がカラウルに家長としてとどまることを望んだ。私が若い妻と共にここに始めてきたときの事を私は忘れられない。盲目の母はイコンを手にして、私たちをまさにこの階段の上で出迎えた。全ての農民（деревня）がそこにおり、そして母は私たちをカラウルの新しい主人としてミールに紹介した。それ以来16年経ち、私たちはあなたたちと常に平和と協調の内に暮らしてきた。あなたたちは私の喜びをわかし持った。あなたたちは私の悲しみをわかし持った。神が人間のこの世で蒙りうる最大の不幸を私たちにつかわそうとお考えになったとき、私たちが自分の子供たちを埋葬したとき、あなたたちもまたそこにいた。外部の人々は（あなたたちの）その参列に感動した。なぜならそこに全ての事が表現されていたのだから。そして

このことも私は忘れはしない。

今や私は老い、悲しみに沈んでいる。私には小供たちがもういない。おそらく私があなたたちと共に生きるのはもうそれ程長くはないだろう。しかし私の相続人が誰であろうとも、私は一つの事を望む。すなわち、彼ら（相続人たち）が、私の父が暮らしたように、私の弟が暮らしたように、そして私が暮らしたように、あなたたちと平和の内に暮らすことを。そしてもし50年後に、神が私たち一族の誰かにカラウルの主人であることをお許しになるのであれば、この場につらなっている若者たちの内で、その時も生きている者に注文したい。すなわちその者たちが彼（50年後のカラウルの主人）の所にいきこう言って欲しい。1837年に私の父がカラウルを買い農民にご馳走を振舞い、1887年に私が同様に過ぎ去った50年を記念して、父と母を追憶して、そして、カラウルの地主たちとカラウルの農民たちとの変わらぬ友愛に満ちた関係を記念してご馳走を振舞ったと。さらにその際、50年後にカラウルの全ての過去と全ての以前の領主を記念して、再び同様な振舞いをするように注文して欲しい。

今や私はあなたたちと共にヴォッカの杯を飲み干そう。カラウルの繁栄と、カラウルの地主たちとカラウルの農民たちとの子々孫々にわたる、善良で心からの家族的関係の保持のために乾杯。¹⁶⁾」（カッコ内は筆者）

1850年代に自由主義の若き理論家として世上の注目を集めたチチャーリンは、自由主義陣営内で孤立し、学問的にも敬して遠ざけられていた。また彼が教育係を勤め、その英明さに大きな期待を寄せた皇太子ニコライは1865年に病没し、大学の自治を巡る問題で1868年モスクワ大学を退官し、さらに1883年にモスクワ市長の職を事実上解任された。彼の改革の試みはことごとく挫折した。三人の子供すべてを病気で失い、彼は当時失意の底にあった。学問と妻と親戚友人たちとの小さな集まりが彼の世界であった。このような彼の心情がこの演説ににじみでている。

ここに描き出されているのは、良き地主と善良な農民たちとの「友愛に満ちた」理想的な関係である。しかし必ずしも常に、地主と農民との「友愛に満ちた」関係が存在していたのではない。1861年の農奴解放令公布後に、チチャーリン家の所領でも争議が勃発した。地主地と農民の分与地を分割する際、チチャーリン家は、農民の一村落を他の場所に移そうとした。しかし農民たちは同意せず、軍隊の導入が決定された。チチャーリンによれば、その直前にチチャーリンの妹、当時22歳のアレクサンドラが農民たちのもとに出かけ、「地主とのかくも長く良好な関係の後に、軍隊が服従しないものたちの鎮圧のためにカラウルに導入されるのは、はずべき事である」と、農民たちを「諫めた」ために、争議は平和的に解決したという¹⁷⁾。しかし、『内務省報告』では、「軍隊を導入し12名を罰した後、領内の安寧秩序は確立された。¹⁸⁾」と記されている。

次にチチャーリンの農業経営の実態についてみてみよう。1860年彼の父ニコライ・ワシリエヴィッチ（1801-1860）が死ぬと所領は兄弟たちの間で八つに分割され、ボリスは、1600デシャチナの土地と宅地を相続した。年間の収益は3-4000ルーブルであったという。1871年4月にアレクサンドラ・アレーヴナ・カプニスト（1845-1920）と結婚すると、妻は、1500デシャチナの小ロシアの領地を持参し、全体で、年収7-8000ルーブルであった。

農奴解放後から1870年代初頭までのロシア農業は、鉄道網の延長にともなう土地の高騰と穀物価格の上昇によって、さらに作柄にも恵まれて、好調であった。しかし、南北戦争後のアメリカ産小麦のヨーロッパ市場参入によって、ロシア農業は大きな打撃を受ける。チチェーリンの所領においても、それは一定の打撃を与えたが、それ以前から始めた、タバコ栽培の成功によって、その後の慢性的な「農業危機」に耐えることができた。以上から、彼を資本主義的農業経営者に転化することに成功した貴族と捉えることもできよう。確かに、経済的範疇からはそうも言えよう。「多くの貴族の領地が、資本家の手に移ったが、これは不可避なことであり、悪と見なすことはできない。これは土地所有の運動の自然な結果である。¹⁹⁾」とも彼は言う。しかし反面、貴族層の経営危機を彼とその家族が回避できたが故に、その旧来の、生活感、生活倫理を温存し得たのではなかろうか。

チチェーリンの「50周年演説」は、オットー・ブルンナーの「全き家」概念を相起させる。ブルンナーは論文『「全き家」と旧ヨーロッパの『家政学』』において、近代の国民経済学とそれ以前の家政学を、「市場から出発する経済思考」と「家から出発する経済思考」と捉え次のように述べる。「まさに18世紀に至るまで『経済』というものは、それ以後の理解とは異なると考えられ方をされたのである。近代的な観点からすれば、旧ヨーロッパの家政学は、倫理学、社会学、教育学、医学、それに家政と農業についてのさまざまな技術といった分野にわたる理論の複合体といえる。それは国民経済学でもなければ経済学でもなく、単なる家計ないし消費の教えでもない。その背後には『家』の内の一体性がそこでの生活の総体として存在していたことを、今日のわれわれはもはやほとんど見てとることができない。したがって、のちの人間がそのような家政学を一種の百科辞典のようなものと見ることも、しばしばおこりえたのである。しかしこの家政学は、明らかに、今日なお農民のなかに残っている一つの古い思考様式に対応するものである。農民が自分の『経済』という場合、かれらは自己の家政＝農業活動の全複合体、すなわちオイコスを念頭に浮かべているのであり、それは、そこに住む人々、すなわち主婦や一緒に働いている家族や僕卑なしには考えられないものなのである。²⁰⁾」国民経済学においては、市場が理論的にも、実践的にも体系の焦点、核心である。「家政学」においては、それは家長の人格である。家長の人格を媒介として、種々雑多な領域（経済、医学、教育等々）は内的に統一されているのである。

したがって、「全き家」概念がチチェーリンの思想を理解するための有効な概念装置か否かは、なによりも先ず、彼の経済理論の分析によって検証されなければならない。そして、この作業はまた逆に、彼の経済理論を新しい次元で考察することを可能にするであろう。チチェーリンはロシアで最初のマルクス経済学批判者の一人として知られ、ジーベルとの間で『資本家』第一巻をめぐる論争を行った²¹⁾。また経済学に関するいくつかの著作を残している。しかし彼の経済学の評価は高くない。マルクスは彼の『私的所有と国家』をセイ流の俗流経済学に過ぎないとして、途中で読むのをやめてしまったという。ベルジャーエフはチチェーリンの政治思想を高く評価しながら、その経済学については、時代遅れのマンチェスター学派の経済学であり、「ブルジョアの価値に鎖でつながれた」「無惨な」産物とした²²⁾。ソ連の経済学説史においても同様な評価である²³⁾。そのためもあって、

従来チチャーリン研究者たちは彼の経済理論をほとんど無視ないし軽視してきた。(この点においてはヴァリツキも同様である。)筆者もまた、彼の経済学は、経済理論上は取るに足らないものであると考える。しかしチチャーリンの理論体系の中で、経済学だけがとりわけ拙劣であり、論理的矛盾が頻繁に見受けられる点に、筆者は従来から、疑問を持っていた。ブルナーの前掲論文に示唆されて、彼の経済学を家政学と読み変えて行くと、すなわち体系の焦点が「市場」ではなく、「家」にあるとすると、彼の経済学の「拙劣さ」の意味が理解可能になる。

チチャーリンの経済理論は、ソ連の経済学説史上「俗流ブルジョア経済学」とされるが、この「俗流」とは何をさすのであろうか。マルクスは『剰余価値学説史』においてセイをこのように規定したが、そこではセイがスミス経済学の通俗的な解説者であるということとともに、スミス・リカードと引き継がれる労働価値説を放棄したことが強調される。セイはスミス価値論の二つの側面、すなわち、労働価値説と生産費構成説のうち、後者のみを受け入れ、しかも生産構成諸要素の価値が需給関係により決定されることを強調することによって、最終的に、価値と価格を同一視した。価値論を自己の基底にすえるマルクス経済学にとって、セイが「俗流」経済学者とされたのも当然であった。一方近代経済学においては、セイの価値論を「効用価値論」の系譜においてとらえ、彼の「販路説」をワルラスの一般均衡理論の先駆とするとともに、シュンペーターのセイ再評価以降、彼の企業家概念が注目されるようになった²⁴⁾。

ここで注目すべきはチチャーリンが、イギリス古典派経済学ではなく、フランスとりわけセイの経済学を受け入れた点である。チチャーリンの経済理論を一瞥すれば、彼がセイ経済学の基本的枠組みを受け入れたことは明白となる。彼は、「流通の法則によって最終的に全ての経済関係は規定される²⁵⁾」として、流通を体系の中心におく。そして、需給関係から価値を規定する、その結果、価値と価格を同一視する。さらにとりわけ重要な点は、彼がセイにならって、生産活動の主体を、自然力(主に土地)、労働、資本の三要素に、企業家を加えて、四要素として捉えたことである。この企業家概念こそ、チチャーリンの経済学を理解するための、キーワードであると筆者は考える。本論文ではチチャーリンの経済学の全体を紹介することはせず、地代、企業家概念に焦点を当てて、彼の経済学を検討する。

1) 地代論

彼は生産を構成する要素を、自然力、労働、資本、企業家、の四つに分ける。自然力も生産構成要素である以上、それ自体の内に価値があることになる。自然力の中で彼が問題にするのは、「量的に限りのあるもの」特に土地である。彼は「耕作の利益から自立した、土地からの収入を地代²⁶⁾」と定義する。つまり、農業資本家の投下資本および農業労働者の労働以外に由来する利潤が地代であると言う。すなわち、地代は自然力に由来する利潤と言うことになる。彼は「地代の中に、人間によって獲得された自然力の作用に対する支払が、少なくとも部分的には含まれていることは明らかである²⁷⁾」と述べた。ここで問題となるのは「少なくとも部分的には」という限定である。この限定により、自然力以外にも地代の構成部分が存在しなくてはならなくなる。しかし彼によれば、利潤は「生

産の各々の活動主体に分配される²⁸⁾」のであり、その「活動主体」とは自然力、労働、資本、企業家の意志以外に存在せず、後三者はそれぞれ労賃、利潤、企業家の報酬という独自のカテゴリーの収入を得るのである。彼の経済学の内的論理からは、「少なくとも部分的には」という限定の出てくる余地はない。何故彼はこのような論理矛盾を犯したのか。

彼はリカードの差額地代論に依拠して地代を導出する。しかし差額地代論からは、自然力に由来する富を特定の個人が占有するのは不正であり、私的土地所有は不正であるという主張が論理的には出てくる。セイは地代の源泉を地主による土地独占に求めて、リカードの差額地代論に反対した。しかし社会主義者を主要な敵と見なしたチチュエリンにとっては、もはやセイの立場を踏襲することはできなかった。彼にとっては、経済学の枠内で、地代の正当性を論証する必要があった。彼は理論的により洗練された差額地代論を受け入れた。しかし上述したように、差額地代論もまた地代を正当化するには不十分であった。この難問を彼はいかに解決するのか。彼は「地代についての上述の純粹に経済的理論（すなわち差額地代論…杉浦）も、著しい修正が必要²⁹⁾」であると述べ、その論拠として以下の三点を指摘する。

第一に「誰の物でも無い自然力の個人による最初の取得が、彼の奪われ難い権利を成す。同時にここにすべての産業発展の最初のそして不可欠の条件がある。…もし占有者が土地の合法的所有者であれば、彼はそこから収入を得る奪われ難い権利を有する。それは産業的企業に資本を投じた資本家の場合とまったく同様である。³⁰⁾」第二に、「一般に、土地は工業や商業が与える収入より小さい収入を与える。それにも関わらず、貨幣を所有する人々が土地を買う決心をすれば、それは土地所有がある程度非物質的利益を帯びるからである³¹⁾」この「非物質的利益」とは「家族性格の強固さ、土地（место）への愛着、所有感³²⁾」である。第三に、「現実において、自然力の関与する部分と資本の関与する部分は、土地の価値と収益性の中で極めて多様であり、それらの区分は不可能である³³⁾」という点である。以上の彼の議論を論駁するのは容易である。そもそも彼は、経済領域はそのものとして考察されなくてはならず、社会主義者の最大の誤りは、経済領域に「道德問題」を持ち込むことにあると、再三強調したのである。ところが地代論においては、彼自身が同様の「誤り」を犯す。第一の論拠については、資本家も地主も所有権者という法的意味においては、同一であると言うに過ぎず、経済問題を法律問題にすり替えている。第三の論拠については、利益の現実的区別の可能性と、理論的範疇分けを混同している。注目すべきは第二の論拠である。「家族生活の強固さ」「土地への愛着」「所有感」が地代の源泉として地代論で扱われているのである。ここに道德問題の経済領域への持込みを見出すのは容易であろう。しかも、道德問題が経済領域一般ではなく、土地所有に結びつけられていることを筆者は強調したい。

2) 企業家と株式会社

彼は自然力、労働、資本を結合する要素として「方向を与える意志」すなわち、企業家をおく。企業家は「生産の全ての諸要素を結合し、それらを共通の目的、経済的利益の獲得へと向わせる³⁴⁾」。従って「国の全ての経済的富は、企業家の個人的資質に依存している³⁵⁾」のである。企業家の資質としては、組織化の才能、人を選び管理する能力、経済

的諸条件と生産手段についての知識、ありうべき利益と損失を正しく判断する能力、が要求される。企業家の収入は、二つのカテゴリーに分割される。第一は、彼の「労働」に対する支払である。ここから分かるように、彼の労働概念は、肉体労働ばかりではなく、指揮監督労働、および生産に必要な科学技術知識、「企業的才能」等を含むものである。第二は企業リスクへの代償である。以上の議論はほとんどセイの議論を踏襲している。セイの企業家概念については、フランス経済学史研究においては、それをイギリスの産業にたいするセイのリアルな現実認識に由来するとみるか、あるいは国家の資金援助に依存したフランス資本主義の後進性の反映とみるかの相違はあるものの、シュンペーターの「経営者」概念に連なるものであることは認められているようである³⁶⁾。すくなくともそれはフランス資本主義の後進性の反映であっても、資本主義に対する後進性の反映とは捉えられていない。しかし筆者は、チチャーリンの企業家概念が、論理の枠組みとしてはセイに依拠していながらも、そこ背後にある彼の生活感、生活世界が、資本主義以前の貴族的なものであると考える。それは次のような彼の叙述からも察せられる。「純粋に肉体的労働は二重に従属的性格を持つ。労働大衆の上に、知識、才能、気質 (характер) の貴族制が立つ。そして後者は後者で、方向を与える意志の君主制的指導に服する。³⁷⁾」「これら三つの原理 (知識、才能、気質…杉浦) は、労働の精神的要素である。これらは大衆には所属しない。これは少数者の純粋に個人的資質である。³⁸⁾」

チチャーリンにとって資本とは、人類が過去から受け継いできた富の総体、過去の全ての労働の産物を意味する。したがって「過渡的意義を持つ歴史的カテゴリーとして資本主義的生産を論ずることはまったく無意味」であり「資本は人類の歴史そのもの」であることになる³⁹⁾。彼にとって、資本は「新たな生産へと向けられた富一般⁴⁰⁾」へと解消される。ここから二つの帰結が導出される。第一に前資本主義的生産様式と資本主義的生産様式の根本的相違が無視され、封建的土地所有者の富もまた、それが「新たな生産へと向けられさえすれば」資本となるのである。市場が生活の全側面をおおいつくしていく資本主義の体制としての認識を彼が欠いていた以上、一方では、資本主義以前の社会が帯びていた生活様式、生活感、価値意識と資本主義社会のそれとが混同され、他方で、資本主義社会における市場、あるいは商品の持つ決定的な意味が見失われる。第二に、彼にとって、資本は、それ自体としては発展の原動力たりえないものである。従って、それに連動を与える力として、企業家という人格的要素が外部から持ち込まれる。

彼は19世紀末の巨大な株式会社の形成を目の当たりにして、株式会社と、産業独占の問題を論ずる。彼は、企業家に必要な個人的資質と条件 (才能と共に、ある程度の信用と、資産を有していること。) を列挙したのちに、それらが一個人の内に全て含まれていることは稀であるがゆえに、株式会社が設立されたとのべる。しかし彼によれば、株式会社においても、意志は単独でなければならず、「ここでも全てが、その長たる個人への信頼に依存している⁴¹⁾」のである。ところが「ある事業のためにより多数の力が統一されればされるほど、それは事業を統制することがより困難になる。それ故株式会社は通常少数の人々に、しばしば一人の手中に落ちる⁴²⁾」。だが、スエズ運河建設に成功したレセップスがパナマ運河では失敗したように、いかに有能な経営者といえども常に成功するとは限ら

ない。失敗の結果、会社内部で争いが生じ、会社は解散される。「それ故、多数の諸力の結合に基づく巨大企業は、自己自身の内にその解体の芽を有するのであり、…長期間存続し得ない。⁴³⁾」このように彼の巨大企業観は、独占価格の形成によって独占利潤を取得する、安定した大企業ではなく、冒険的で才覚のある個人を核として一時的に形成された組織に過ぎない。彼の「企業家」とはしたがって、前期資本主義の冒険的投機家か、あるいは個人商店の主人である。この企業家をシュンペーターの「経営者」と同一視できないのは明らかであろう。

彼は一方では土地所有の安定性とその倫理的、道徳的性格を強調し、他方では、商工業の不安定性、投機的性格を指摘した。そして彼が論理的には、市民社会の学である国民経済学に依拠していたとしても、彼の叙述からは近代市民社会のイメージが浮かび上がってこない。反対に市民社会と市場の自立性と安定性に対する彼の懐疑が浮かび上がってくる。ブルンナーにならって経済学と家政学を、市場から出発する思考と家から出発する思考と規定するならば、彼の思考は明らかに家から出発している。ヴァリツキはチチャーリンの経済思想の分類は「簡単である⁴⁾」と述べそれが典型的な「古典的自由主義」の経済理論であるとした。チチャーリンが国家の経済領域への介入に反対し、ミクロ経済学的な市場概念を有していたとして、彼をシュンペーター、ハイエクの先行者であると述べる⁴⁵⁾。しかしハイエクにとって市場は商品流通の場としてだけでなく、知識、情報流通の場として、秩序形成にとって決定的な意義を持つ。また経済領域が社会秩序の中核であった⁴⁶⁾。しかしチチャーリンにとっては経済領域自体には秩序維持機能はない。両者の思想体系において占める「経済」の位置はまったく異なるのである。ヴァリツキはチチャーリンの思想体系全体の中で彼の「経済学」を位置づけることをせず、経済理論のみを孤立的に考察する。その結果チチャーリンが依拠していたセイの流通中心の「経済理論」の論理を、思想体系全体の論理と混同するのである。「経済理論」の枠内における「市場」の位置づけを、「市場」を媒介とした近代市民社会が生み出した思想、あるいは世界観（その意味で近代市民社会の思想は「市場」を基盤としている。）と同一視してはならない。

2 有徳の貴族と政治自由

家政学が「家から出発する経済思考」であるとするならば、チチャーリンの家、家族概念を検討しなければならない。彼には二つの家族観、すなわち契約的家族観と、有機体的家族観が、後者の優位のもとに並存している。「結婚は両性の合意に完全に基づく⁴⁷⁾」、「結婚は疑いなく市民的制度である⁴⁸⁾」、として限定付きながら離婚も許容される。しかしカントが『人倫の形而上学』において夫婦の性交渉までも契約論的に説明したような徹底性は、彼の家族論にはない。「家族的結合が強固であることは、国家秩序の最重要な基礎⁴⁹⁾」であり、「特に貴族にとって、この結合が強固であることが重要である。⁵⁰⁾」「男性の本質的特性は意志である。それゆえ男性に国家における優越的役割が帰属する。女性の本質的特性は感情である。それゆえ女性に家族生活における主要な役割が帰属する。ここでも権力は意志に付与される。それゆえ男性は、特に対外関係においては、家族の主 (глава)

でありつづける。しかし権力ではなく、愛が家族生活の優越的原理をなすのであり、この点に関して、女性は第一の地位を占める。女性は家庭の真の中心であり、内的結合、生気を与える精神である。女性に全ての家族的幸福が依存している。⁵¹⁾「それゆえ女性の側からの家族的義務の侵犯は、男性の側からのそれよりも、比べものにならぬほど重大な犯罪と見なされるのである。⁵²⁾」このように彼は男性家長の権力のもとに妻が従属するのが、本来の家族であるとする。さらに注目すべき主人と下僕（слуги）との関係である。彼は古代ローマでも、農奴制下のロシアにおいても、「伝統と愛に基づく主人と下僕との緊密な関係が道徳的エレメントを成していた⁵³⁾」と言うにとどまらず、「自由な諸関係のもとでも」すなわち、農奴解放後においても、主人と下僕との「道徳的結び付き」を「家族関係の哲学的評価に際して見失ってはならない⁵⁴⁾」と主張する。「この観点からは、下僕は家族の一部である。そしてこの結び付きが緊密かつ道徳的であればあるほど、家族生活そのものもがより高く美しくなる。⁵⁵⁾」アリストテレスは『政治学』において、夫と妻、親と子、と並べて主人と奴隷との関係をも家族論で論じたが、チチャーリンもこの点ではアリストテレスと一致する。もちろんここでチチャーリンは主人と下僕の関係のみを論じているのであるが、この関係は地主と農民との関係にも容易に拡大され得る。それ故彼は「50周年演説」で「地主と農民との結び付きは以前のように友愛に満ちた家族的なもので有り続けた」と農奴解放後も確信を持って述べる事ができたのである。

この彼の家族観を見れば、彼の女性問題への対応もおのずと明かとなる。1861年の大学紛争の際、女性の大学入学を許可するか否かが問題となった。女性の大学入学の要求はそれほど「過激」なものではなく、むしろ「自由主義的」なものであった。カヴェーリンはその積極的な支持者であった。ところがチチャーリンは「若い女性たちが若い男たちの扱い方を知らないうちに、彼女たちに大学への入学を許可することは、最高の無分別である。⁵⁶⁾」と断固反対した。また彼は女性の政治参加を理論的には認めないばかりか、女性の「市民的活動」にたいしても批判的である。「民主主義が発達すればするほど、女性の本性に反する風俗の粗野化を引き起こす。⁵⁷⁾」「女性は覚めた悟性よりも感情に、抽象的概念よりも私的關係に、より多く左右される。⁵⁸⁾」それ故女性は家庭内にとどまるべきだと彼は言う。

さてここで再び彼の土地所有論に戻ろう。彼は、所有を動産所有と不動産所有の二つに分ける。彼によれば、不動産、すなわち土地所有者は、「土地の不動性、農耕の規則性、ゆっくりした進歩⁵⁹⁾」のゆえに保守的精神を発達させ、それは「常に国家的存在の基盤となる」。特に大土地所有者は「貴族の物質的基盤」として重視される。「真の貴族は政治的貴族である。大土地所有はその物質的支柱をなす。この基礎の上に、伝統への尊敬と自由への志向を結合するところの政治的精神が発達する。ただこの精神だけが貴族に高い尊敬を受ける権利を与える。⁶⁰⁾」つまり大土地所有者と「伝統への尊敬」「自由への志向」が結びつけられているのである。この彼の叙述は、我々を再びブルンナーへと連れ戻す。ブルンナーは「全き家」の家長の思考様式を「貴族的思考様式」と規定し、その「倫理学すなわち『実践哲学』は、核心において、個別の人間、家長、為政者の美德論であった。人間、家、国家がそれぞれの『本質』すなわちその存在にどれだけ近付き得るかは、美德を有するか否

かにかかっていた。」「自己の内面や家やポリスに対する人間の支配を可能にし、それ故『ティオリア』においても、これになぞらえヌースすなわち神が支配する宇宙の構造とみてとるのは、貴族の美德に外ならない。⁶¹⁾」ヘーゲルは『精神現象学』のなかで中世的美德が勃興しつつあった市民社会秩序に敗れ去っていく過程を「徳の騎士」と「世路」(＝市民社会)との闘争および下世話で無教養な「世路」の勝利として描いた。これを念頭に置いて、筆者はかつて、チチャーリンが市民社会の内的秩序を見ることができず、政治統合をあくまで政治の枠内にのみ追求したこと、彼の政治的理想が「徳の騎士」の集団による統治であったことを指摘した⁶²⁾。ヘーゲルの「徳の騎士」概念はブルンナーの「全き家」概念に通じる。チチャーリンが「政治」を見るとき眼差しは、この「徳の騎士」の「美德」論からのものであった。彼にとって政治は「徳の騎士」の集団が行うべきものであり、「美德」あるいは「政治的能力⁶³⁾」を有しないもの、すなわち大衆は政治から排除される。そして彼にとって、「政治的能力」の有無の基準が知識そのものではなく、財産に結び付けられた知識であったことは重要である。「学校を出たことは自立的立場や、ものごとに対する実践的見解や、秩序への愛着などを与えはしない。反対に、所有のないものの教育は、余りにしばしば、出世を助ける人々への追従となるか、または自分の出世を妨げている現存の社会制度への不満をその者の中に生みだし、…急進的理念の温床になる。…教育を受けた人間は、自分自身の将来を確立することによって、世の中における自己の自立の保証となる富を獲得することによって、まず自己の能力を証明しなくてはならない。これが人類共通の宿命であり、人間にとって物質的富の獲得は精神的富の獲得の条件になる。⁶⁴⁾」しかも国民の「大多数は常に、また将来も肉体労働に従事する⁶⁵⁾」こともまた、人類の宿命であると彼は言うのであるから、大多数の人々にとっては「自己の能力を証明することは」永遠に不可能なことである。したがって、彼がロシア社会の「啓蒙」をしばしば訴え、それにロシアの未来を託そうが、彼は言葉の厳密な意味での啓蒙主義者ではない。彼は次のように言う。「もし教養が必然的に、社会において不平等に分配されるのであれば、もっとも教養ある部分すなわち富裕階級が指導的部分であらねばならない。それ故民主制は人間社会の理想たり得ない。⁶⁶⁾」

この点で注目すべきは、彼のジャーナリズムと職業専門家に対する冷やかな対応である。彼はロシアのような未熟な社会では、新聞雑誌は有害であるとししばしば主張した。彼によれば学問的素養のない人々は、新聞、雑誌の二三の政治論文を読んで、現実の政治問題について判断する。しかも、彼らは通常一種類の新聞、雑誌しか読まない。したがって彼らは特定の思想傾向に影響され、その結果社会はそれぞれに一面的な思想を持つ複数の集団に分裂する。それ故チェルヌィシェフスキーやカトコフのようなロシア社会に害悪のみをまき散らす者が大きな影響力を持ち得たのである、と彼は言う。また彼は弁護士、医師、等の専門的職業人の社会的影響力の増大をも苦々しくながめやる。彼は自らの政治見解を人々に訴え、支持を獲得することではなく、自己と同じ様な「全一的」、百科全書的人間により政治が担われることを求める。このような社会把握においては、大衆の政治的動員、宣伝扇動、政党の組織化等の発想は出てこない。

この筆者のチチャーリン理解に対して、いくつかの批判が予期される。ハマーはチチャー

リンが晩年になるほど左傾化したと主張した⁶⁷⁾。彼はおそらくチチャーリが『20世紀前夜のロシア』においてはっきりと制限君主制を主張したことを念頭にいているのであろう。またプレハーノフもこの著作に注目し、これをロシア自由主義の左傾化の徴候とみて、自由主義者との連携を模索した⁶⁸⁾。この彼の「左傾化」と本論文で描き出したチチャーリン像との間に断絶があるのではないかと、との批判がなされ得る。彼が1880年代以降ツァーリズム批判を強めたことは事実であり、筆者もまたこの変化を、彼が西欧自由主義の代議制論と同一の地平に立ったものとして、注目した。⁶⁹⁾しかし制限君主制の要求そのものは、貴族主義的立場と本来矛盾しない。さらに筆者が問題にしているのは具体的な政治体制論でも、政策課題でもなく、「政治」に対する姿勢、「政治」のとらえ方そのものである。第二に、ヴァリツキは前述したように、チチャーリンが自然権的人権の否定から、その積極的擁護へと立場を変えたことを強調した。確かにチチャーリンは後年になればなるほど、ヘーゲル的個人概念への批判を強め、カント的自由概念、個人概念を擁護するようになる。しかしヴァリツキはチチャーリンの自然権的人権への傾斜が、貴族的特権の擁護への傾斜を伴っていたことを見落としている⁷⁰⁾。筆者が、彼の家族概念の考察において、先に引用した文章は、『法哲学』(1900)からのものである。この著作の基本的枠組みはカント哲学である。カント的自由権と個人主義がもっとも強調されたこの著作のなかで、主人と下僕との関係が、家族的関係として考察されているのである。

1890年代末の貴族の経済的苦境とそれに対する政府の救済策を論じた諸論文の中で、彼は政府の高率保護関税政策に反対し、また鉄道運賃の引下げを要求したが、当時貴族の多数が要求していた政府の貴族への経済援助には断固反対した。「国家が必要としているのは、扶養される勢力ではなく、国家が依拠し得る強固な社会勢力である。貴族の全ての国家的意義は、貴族が自己の足で立っていることである。⁷¹⁾」この彼の主張は貴族の多数から批判を招いたが、彼はそれらの批判に応えて、次のように述べた。「おそらく私の要求は、現代の現実主義的世代にとってはあまりに高踏的であろう。この点で私は時代遅れであると認める用意がある。私が若い頃から、高貴な身分の観念を名誉と美德の最高の観念と結び付けることになれ親しんできたことを許してほしい。たとえそれが現実において常に適用されうるものではまったくないとしても、すくなくとも、それは常に要請として承認されてきた。もし要請そのものが否定されるのであれば、もし貴族がそれを無関心な軽蔑をもって眺めるのであれば、貴族の中にいかなる道徳的内容が残るのであろうか。⁷²⁾」カントは『実践理性批判』で「自由は道徳の認識根拠であり、道徳は自由の存在根拠である。」と述べた。また実践理性の「要請」として、道徳法則を導出した。チチャーリンは道徳的「要請」として、経済的自立、および「名誉」と「美德」の保持を貴族に求めるのである。しかも専制下においては貴族(ドゥヴォリヤンストヴォ)は自由、権利および個人の尊厳の唯一の土壌であった。それは立憲制においても社会の上層を形成する非身分的な「アリストクラーツィア」として、秩序と自由を結び付ける社会層として、「人間の形而上学的本質」の擁護者として、必要とされた。彼にあっては、専制下における身分的自由の唯一の保持者である貴族は、立憲制へ移行して、全国民に市民的自由が与えられた後に身分的特権を失う。しかし彼は大多数の国民にとって、自由と恣意とが混同されると考えた。自

由に道徳性を付与し、個人の尊厳を保持し、それによって利己的恣意の氾濫から自由を引き上げ、自由を「市民的自由」たらしめるものが貴族（アリストクラーツィア）であった。このように彼によってカント的自由論は貴族的エートスによって解釈されるのである。この「貴族論」がチチェーリンの「運動論」でもある。そして彼自身も「アリストクラーツィア」として振舞い、ツァーリ政府に対抗して「市民的自由」を擁護しようとした。「徳の騎士」の集団の養成、すなわちドゥヴォリヤンストヴォたるロシア貴族をアリストクラーツィアへと陶冶することが彼の課題となる。もちろん現実のロシアにおいてそれは失敗を運命づけられた「運動論」であった。彼がその失敗に完全に気が付いたとき、「対外的カタストロフィー」すなわち、戦争でのロシアの敗北と、その敗北から「ロシアのシュタイン、ロシアのビスマルク」が出現することに最後の期待をかけた⁷³⁾。これもまた運動論たり得ない「運動論」であり、シュタイン、ビスマルクという「徳の騎士」待望論であることには変わりはない。

3 「二つの自由主義」のシェーマ

—— ロシア自由主義理解のための作業仮説として ——

今までの論述で筆者はチチェーリンの思想が貴族的エートスに貫かれていたことを強調した。このことによって、筆者はチチェーリンが、近代自由主義と無縁であると言うつもりはない。指摘したいのは、チチェーリンの思想において、近代市民的自由主義、と近代以前の貴族的自由主義が並存していた点である。チチェーリンにおける二つの「自由主義」の融合を考える際、ドイツ絶対主義研究の大家クルト・フォン・ラウマーの研究に注目したい。ラウマーは『自由と国家権力』において、「身分的自由」と「フマニズム的自由」を区別し、両者が共同して、絶対主義国家に対抗したと述べた⁷⁴⁾。しかし絶対主義国家の敗北はまた、「身分的自由」の敗北をも意味し、「フマニズム的自由」が最終的に勝利したと彼は言う。

しかしロシアでは第一に、専制権力が長期に渡って存続し、第二に、「身分的自由」の実体、すなわち、ツァーリから相対的に自立し、独自の家臣団をもつ貴族層も存在しなかった。その結果、「身分的自由」と「フマニズム的自由」の思想が同時に、区別されずに、西欧から流入した。このことがチチェーリンの「自由主義」に決定的な刻印を押すことになる。

チチェーリンは1840年代末から1850年代にかけて、ロシア史の研究をもって、自己の思想的営みを開始した。彼はロシア史を氏族共同体、市民社会、国家の三段階を経て発展する過程として把握した。市民社会段階とは分領時代からイワン雷帝までの、いわゆるロシア中世を指す。彼によれば市民社会とは私法が支配する社会であり、各人が相互に敵対する私的世界、万人の万人に対する戦争状態であった。ここで注目すべきは、チチェーリンにとって、市民社会の成員が、なによりもまず、諸公、貴族として把握されていた点である。イワン雷帝以降に成立する国家は、諸公、貴族の争いを鎮め、公法の支配を確立し、万人の法の前での平等を実現することを使命とした。すなわち、彼は身分的特権の否定と

「フマニズム的自由」が、国家によって実現されると考えたのである。現実には「フマニズム的自由」は国家権力への対抗として実現したのであるが、彼はヘーゲルの理性的国家概念に依拠して、国家と社会の和解を迫る。しかし「大改革」は彼が望んだような国家と社会の和解をもたらさなかった。現実のロシア国家はますます「市民的自由」の抑圧へと傾き、社会には「教養のない群衆」「デマゴグ」が溢れた。それへの対抗として、彼は貴族に注目し、「貴族的自由」を主張するにいたる。このように、貴族を「市民」へと陶冶するという、彼の運動論こそが、「フマニズム的自由」と「身分的自由」の二つの自由概念の同時流入と、両者の未分化というロシア「自由主義」の特徴を典型的に表現したものであると言えよう。

「二つの自由主義」概念は、チチェーリンの「思考」を理解するためには、有効なパラダイムであると筆者は考える。これが19世紀から20世紀初頭にかけてのロシア自由主義の流れを理解する上で、いかなる有効性と射程を持つかに関しては、今後の課題としたい。

— 注 —

- (1) カール・シュミット『政治的なものの概念』田中浩，原田武雄訳 未来社 1970，p. 87。
また、レオ・シュトラウス「カール・シュミット『政治的なものの概念』への注解」谷喬夫訳、『みすず』341号は参考になった。
- (2) 同上，p.91。
- (3) Harold J. Laski, *The Rise of European Liberalism*, 2nd imp. 1947. (ハロルド・ラスキ『ヨーロッパ自由主義の発達』石上良平訳，みすず書房，1951)。
- (4) 「生活世界」概念はハーバーマスに依拠した。「コミュニケーション的行為する諸主体は、つねに生活の地平で了解し合う。かれらの生活世界は、多少とも曖昧な、つねに問題のない、その背景にある確信から構成されている。こうした世界の背景は、参加者が問題の余地のないものと前提する状況を規定するための根拠として役立つ。」ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論(上)』河上倫逸他訳 未来社，1985，p. 110。
- (5) チチェーリン研究史については拙稿「B. N. チェーリンとロシアの立憲主義」『スラヴ研究』《35》で簡単に触れた。そこで言及しなかった研究に限り、指摘しておく。社会階級的観点からの研究としては、Н. А. Цаголов, *Очерки русской экономической мысли периода падения крепостного права*, М. 1956. またロシア史学史の研究の多くもこの観点からチチェーリンを理解している。(ロシア史学史におけるチチェーリンの位置づけについては、拙稿「チチェーリンにおける国家と社会」『一橋論叢』第91巻第5号，1984，参照。)彼の哲学を考察した研究としては、D. Tschzewskij, *Hegel Bei Den Slaven*, 1961. チジェフスキーはチチェーリンを「ロシアで最大のヘーゲル主義者」とあり、彼の哲学を「カント化されたヘーゲル主義」と規定した。チチェーリンの経済学については、*История русской экономической мысли*, тт. 1-2 М. 195-1960 がある。
- (6) A. Walicki, *Legal Philosophies of Russian Liberalism*, Oxford, 1987.
- (7) たとえば、南原繁『政治哲学序説』岩波書店，1988。河合栄治郎『自由主義の擁護』白日

書院, 1941。また, シュミットも自由主義の本質を個人主義であるとした。前掲書。

- (8) Walicki, *op. cit.*, p. 1.
- (9) *Ibid.*, p. 3.
- (10) *Ibid.*, p. 3.
- (11) *Ibid.*, p. 6.
- (12) *Ibid.*, p. 402.
- (13) 佐々木毅氏は、『近代政治思想の誕生—16世紀における「政治」』（岩波新書, 1981）において, アリストテレス的政治とマキャベリ政治を対置し, 前者から後者への変化の中に近代政治思想の誕生を見た。氏によれば, 前者の場合「政治学」とはポリス共同体の善きありかたを考察する学であり, 「政治」とはポリス共同体の秩序を前提とし, その秩序を機能させる諸々の方策であった。後者では, 「個々の秩序の乱れではなく, 秩序そのものが問題となる。」「政治」の中心問題は秩序そのものの創出となり, 「政治」は善政論から権力論にかわる。
- (14) ハーバーマス『公共性の構造転換』細谷貞雄訳, 未来社, 1973。ヴァリツキが依拠しているテンニエスにも次のような記述がある。「この哲学（個人主義的, ゲゼルシャフト的哲学—杉浦）の歴史的画期的な偉大な業績は…自然法と, …それと内面的に深く結び付いている, 重農主義的な, イギリスの「古典」学派に受けつがれた「政治経済学」とであった。」テンニエス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』杉之原寿一訳, 岩波文庫, 1957, p. 7。
- (15) 自由主義と市場とが不可分のものであるとする見解には異論がありえよう。たとえば, マクファーソンは自由主義が将来生き残るためには「市場的自由」と「自己発展的自由」を区別し, 前者を克服しなければならないと述べる。マクファーソン『自由民主主義は生き残るか』田口富久治訳, 岩波新書, 1978。しかし, 筆者が問題にしているのは, 自由主義の将来の展望や「あるべき姿」ではなく, 過去の歴史的姿である。
- (16) Чичерин, *Воспоминания*, т. 4. М. 1934, стр. 303-304.
- (17) Чичерин, *Воспоминания*, т. 3. М. 1929. стр. 11.
- (18) *Отмена крепостного права. Доклады министров внутренних дел о проведении крестьянской реформы 1861-1862*, М-Л. 1950. стр. 50.
- (19) Чичерин, *Воспоминания*, т. 3. стр. 14.
- (20) オットー・ブルナー 「『全き家』と旧ヨーロッパの『家政学』」『ヨーロッパ—その歴史と精神』石井紫郎他訳, 岩波書店, 1974. p. 154-155.
- (21) チチャーリンとジーベルとの論争については石川郁男「ロシアにおける『資本論』第一巻をめぐる論争」『茨城大学文理学部紀要（社会科学）』第13号, 1962年12月, 参照。
- (22) Н. Бердяев, Н. К. Михайловский и Б. Н. Чичерин, *Sub specie aeternitatis*, СПб. 1907. стр. 209.
- (23) *История русской экономической мысли*, т. 1.
- (24) シュンペーター『経済分析の歴史』第3巻, p. 1036—1039, 第4巻, p. 1293—1321。
- (25) Чичерин, *Курс государственной науки*, ч. 2. стр. 135.
- (26) *Там же*, стр. 151.
- (27) *Там же*, стр. 151.

- (28) Там же, стр. 150.
- (29) Там же, стр. 153.
- (30) Там же, стр. 153.
- (31) Там же, стр. 153.
- (32) Там же, стр. 153.
- (33) Там же, стр. 154.
- (34) Там же, стр. 130.
- (35) Там же, стр. 130.
- (36) 岡田純一『フランス経済学史研究』御茶の水書房, 1982。同「J. B. セイ経済学と産業」『古典経済学と産業』早大産業経済研究所, 1979。栗田啓子「J. B. セイにおける市場の論理と社会の把握」『古典派経済学研究(1)』早坂忠編, 雄松堂出版, 1984。中久保邦夫「J. B. Say の『生産』と『企業家』」『六甲台論集』vol. 26, no. 1。吉田静一「セー『経済学概論』の構成」『経済学史』羽鳥他編, 世界書院, 1979。
- (37) Чичерин, *Курс государственной науки*, ч. 2, стр. 121.
- (38) Там же, стр. 120.
- (39) Там же, стр. 123.
- (40) Там же, стр. 122.
- (41) Там же, стр. 131.
- (42) Там же, стр. 146.
- (43) Там же, стр. 147.
- (44) Walicki, *op. cit.*, p. 155.
- (45) *Ibid*, p. 156.
- (46) ハイエク『市場, 知識, 自由—自由主義の経済思想』田中真晴他訳, ミネルヴァ書房, 1986, 参照。ハイエクについては, 古賀勝次郎『ハイエクと新自由主義』行人社, 1987, Z. A. ペルチンスキー他編『自由論の系譜—政治哲学における自由の概念—』行人社, 1987参照。
- (47) Чичерин, *Философия права*, М. 1900, стр. 239.
- (48) Чичерин, *Курс государственной науки*, ч. 2, стр. 82.
- (49) Там же, стр. 80.
- (50) Там же, стр. 81.
- (51) Там же, стр. 78.
- (52) Чичерин, *Философия права*, стр. 238.
- (53) Там же, стр. 249-250.
- (54) Там же, стр. 250.
- (55) Там же, стр. 250.
- (56) Чичерин, *Воспоминания*, т. 3, стр. 60.
- (57) Чичерин, *Курс государственной науки*, ч. 2, стр. 77.
- (58) Там же, стр. 77.
- (59) Там же, стр. 206.
- (60) Там же, стр. 208.

杉 浦 秀 一

- (61) ブルンナー, 前掲書, p. 166—167。
- (62) 前掲拙稿, 参照。
- (63) チチエーリンの「政治的能力」概念は, ここで言う「美德」と思想的に重複する。「政治的能力」概念については, 前掲拙稿参照。
- (64) Чичерин, *О народном представительстве*, изд. 2, М. 1899, стр. 16-17.
- (65) Чичерин, *Курс государственной науки*, ч. 2, стр. 117.
- (66) Чичерин, *Философия права*, стр. 267.
- (67) Hammer, D. P. *Two Russian Liberals. The Political Thought of B. N. Chicherin and K. D. Kaverin*, Columbia, 1962.
- (68) Walicki, *op. cit.*, p. 108.
- (69) 前掲拙稿参照。
- (70) 彼の貴族概念とその変遷については前掲拙稿参照。
- (71) Чичерин, *Вопросы политики*, М. 1904, стр. 8.
- (72) *Там же*, стр. 23.
- (73) Чичерин, *Россия накануне двадцатого столетия*, Berlin, 1901, стр. 160.
- (74) K. v. ラウマー『自由と国家権力』千代田寛訳, 未来社, 1970。

The Aspects of Domestic and Political Economy of Chicherin's "Liberalism"

Shuichi SUGIURA

If "liberalism" is, as Carl Schmitt wrote in "Der Begriff des Politischen", not a system of politics but a systematic thinking towards politics, or if it is, as H. Laski has put it, not a dogma but a habit of mind — then we should proceed to analyze the "thinking" or the "habit of mind" prior to analyzing the politics of liberalism within the context of historical research. Especially important this standpoint is as applied to Chicherin, a leading theorist of Russian "liberalism".

A. Walicki in his book "Legal Philosophies of Russian Liberalism" regarded Chicherin as a source of Russian liberalistic thought and named him "classical liberalist". According to Walicki, Russian liberalism developed along the following lines : classical — new — social liberalisms. But I can't agree with Walicki. Liberalism may only be formed on the basis of establishment of modern "life world" or "Offentlichkeit" (see J. Habermas, Strukturwandel der Offentlichke"). Within such a "life world", exchange of goods penetrates not only the economics sphere but cultural and philosophical spheres as well, while market thinking — dominating society as it is — turns into the core of social unity. This article is based upon the proposition that modern "Liberalism" is deeply related to "market thinking".

Then, may Chicherin's "Liberalism" be regarded as modern, or not ? In order to solve this problem I have analyzed Chicherin's economic thought. O. Brunner in his article "Das Ganze Haus Und Alte Europaische Okonomie" drew a sharp line between domestic economy and political economy, calling the former "economic thought of a house" and the latter — "economic thought of a market". According to Brunner, the "life world" which domestic economy depended on was "Das Ganze Haus". I think that Chicherin's "Liberalism" should be analyzed on the basis of this particular point of view. Namely, may Chicherin's economic thought be regarded as the "economic thought of a market", or not ?

Searching for the answer to this question I have been paying very special attention to the fact that Chicherin professed the French political economy. The French political economy, particularly that of J. Say, regarded as productive power not only the aspects of capital, labourer's work and land but the "will of the enterprisers" as well. Chicherin treated economic society as a "hierarchic" kind. As for him, enterprisers govern all the rest of the economic society : capitalists, intellectual laboruers, workers, and so on. Moreover, Chicherin does not recognize market as the order-keeping institution. On the surface his theory resembles that of Schumpeter's but essentially it is based deeply upon the old domestic "life

world". So I can't agree with the following thesis of Walicki : He (Chicherin) was anticipating the views later developed by such famous economists as Schumpeter and Hayek". The fact that Chicherin's political economy was rooted in domestic thinking concerns not only his economic theory but the whole of his thought, or habit of mind, as well. K. V. Raumer in his article "Absoluter Staat, Korporative Libertat, personliche Freiheit" distinguished "universal liberty" from the "liberty of one's social status", the aristocratic liberty namely. According to him, these two liberties together formed an alliance against absolutism in Germany. But, followed he, after the defeat of absolutism the "liberty of status" could no longer live and was doomed to die out. I believe that the most pronounced feature of "Russian Liberalism" is found in the fact that these two particular "liberties" had researchde Russia, be way of Western Europe, at the same time, with the Russians being unable to distinguish properly one from another. Eventually the two "liberties" mixed and survived until 19th century. I am convinced that the typical thinker representing such "Russian Liberalism" is in fact Chicherin.